

3 元登戸研究所勤務員自身による 「登戸研究所」掘り起こし運動

当初は親睦と跡碑建立を目的として開催されていた「登研会」ですが、市民や高校生と関わる中で、自分自身が勤めた登戸研究所とはいったいどのようなところだったのか、自分たち自身で掘り起こそうという動きが地域の元若手勤務員を中心に広がります。

その中の一人、前述の井上三郎さんは次のように語っています。

「(昼休み中食堂で上司のひそひそ話が聞こえてきて)(風船爆弾に)細菌を搭載したのではないかとずっと思っていた」

「ずっとあの細菌搭載のうわさが気になっていた。真相が知りたかった。細菌搭載の計画はあったのか、中止した理由はなんなのか。

上司たちは何も語らないまま次々と死んでいく。登研会を作ったのには、旧交を温めるとともに、事実を後世にしっかり伝えるため、今みんなから聞いておかねばとの思いがあった。」

(1995 [平成7] 年8月26日付『読売新聞』より)

元若手勤務員は、自分が行っている作業が一体何に使われるのか、どこに送られるのか一切知らされず、ひたすら仕事に打ち込んでいました。「極秘」とされていた登戸研究所の業務について、戦前はもちろん戦後も誰かに問うことや話すことは憚られました。井上さんの証言からは長年抱えてきた登戸研究所への複雑な思いが感じ取れます。

このような中、伴は自身がまとめた「陸軍登戸研究所の思い出」を登研会で配布します。これは、当時は何もわからなかった若手勤務員たちに登戸研究所の全容を伝えるきっかけとなりました。また伴は、登戸研究所の全容を後世に伝えるため、1988年から手記を執筆します。自身がわからない活動については登研会メンバーに原稿を募り『陸軍登戸研究所の真実』が完成します。このような流れの中で、元勤務員は自身の体験を残し語るようになります。





『毎日新聞』 切り抜き

1981 (昭和 56) 12月 22日付 | 毎日新聞社 | 個人寄贈

匿名ではあるが、元登戸研究所幹部が一般に人体実験の事実を証言した最初期の例。



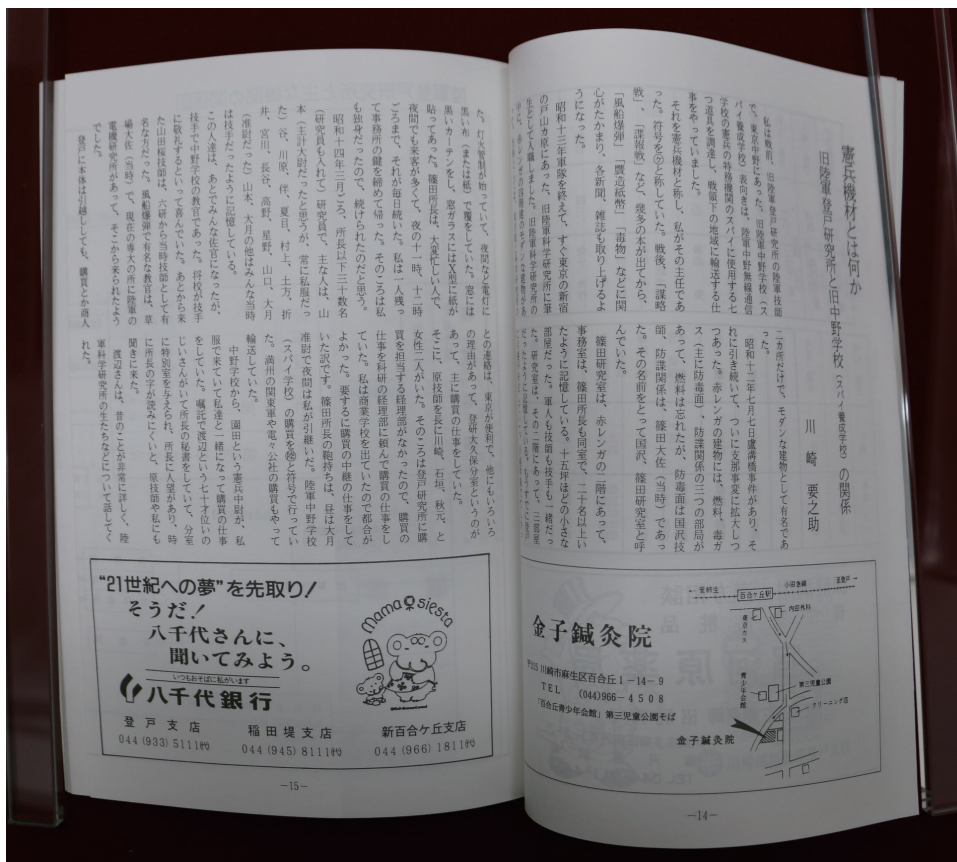
元登戸研究所勤務員らの手記



『あゆたか』第35号～第39号

1997（平成9）年～2001（平成13）年 |
 稲田郷土史会 | 森田忠正氏寄贈

戦後も登戸に住み続けた元技師・川崎要之助（憲兵機材担当）は、地元の郷土史会が発行する『あゆたか』に手記を5年間にわたり掲載した。

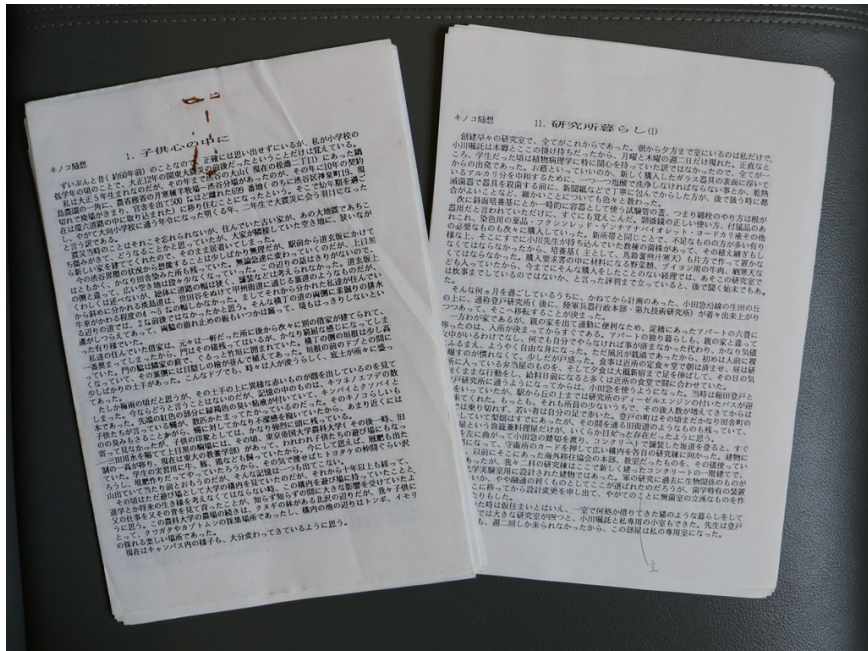


『あゆたか』第35号

1997（平成9）年 | 稲田郷土史会 |
 森田忠正氏寄贈

第二章「登戸研究所」掘り起こし運動

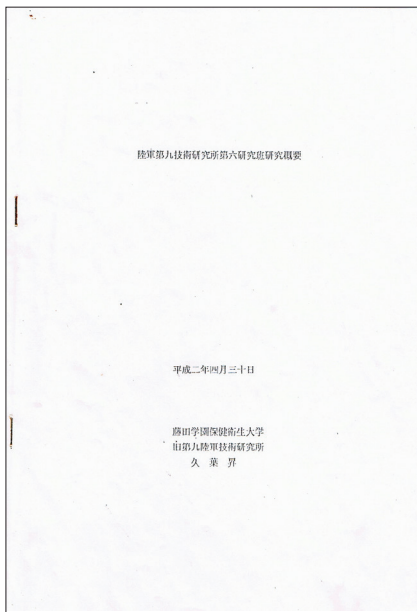




『キノコ随想』

不明 | 松川 仁 | 渡辺賢二氏寄贈

『陸軍登戸研究所の真実』執筆にあたり、伴繁雄に依頼されて提供したものの。松川は第二科第6班（枯葉剤などの開発）の技手だった。



目次

- まえがき 2
- 1 第六班班編表 3
- 2 実戦を企図した家畜伝染病の爆発的流行の方策 3
- 3 独逸野外科牛疫ウイルスの分離、継代と毒力の検定 3
- 4 乾燥牛疫粉末病毒の製造 5
- 5 粉末病毒の毒力検定 6
- 6 粉末病毒の実戦応用予備実験 7
- 7 牛疫野外科感染実験（実戦用） 8
- 8 風船爆弾搭載牛疫粉末病毒を以てする対米攻撃 11
- 9 粉末病毒の謀略的個体感染 11
- 結 語 12

「陸軍第九技術研究所第六^{ママ}研究班研究概要」

1990（平成2）年4月30日 | 久葉 昇 | 渡辺賢二氏寄贈

『陸軍登戸研究所の真実』執筆にあたり、伴繁雄に依頼されて提供したものの。久葉は第二科第7班（牛疫ウィルスの兵器化）の班長であり、少佐だった。

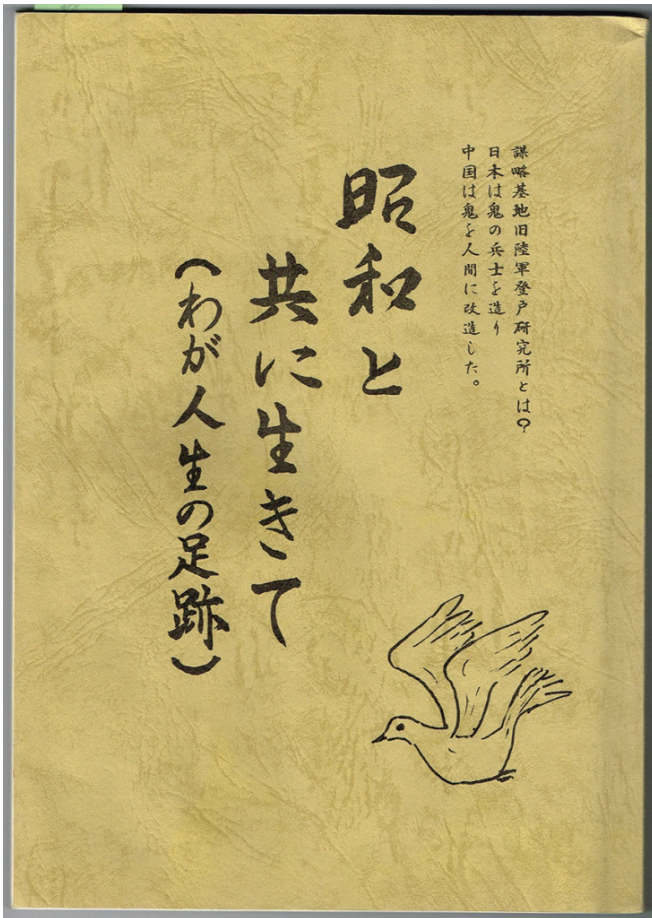
第二章「登戸研究所」掘り起こし運動





『陸軍登戸研究所の真実』原稿

1988（昭和63）年～1993（平成5）年 | 伴 繁雄 | 伴 和子氏寄贈



『昭和と共に生きて（わが人生の足跡）』

1994（平成6）年3月15日 | 和田一夫 | 渡辺賢二氏寄贈

和田も地域から登戸研究所に採用された勤務員の一人。登戸研究所内にあった青年学校のリーダーでもあり、若手勤務員のとりまとめ役だった。孫たちに自分と同じ思いをさせたくない、登戸研究所遺構の保存と活用を強く望み、精力的に証言活動を行った。

